

|          |                                                                               |
|----------|-------------------------------------------------------------------------------|
| 氏 名      | 孫 爽                                                                           |
| 授与した学位   | 博 士                                                                           |
| 専攻分野の名称  | 文 学                                                                           |
| 学位授与番号   | 博甲第 6741 号                                                                    |
| 学位授与の日付  | 2022 年 9 月 22 日                                                               |
| 学位授与の要件  | 社会文化科学研究科 社会文化学専攻<br>(学位規則 4 条第 1 項該当)                                        |
| 学位論文題目   | 日中両言語の否定疑問文の音声的特徴による類型について                                                    |
| 学位論文審査委員 | 教授 栗林 裕                      准教授 片桐 真澄<br>教授 宮崎 和人                  准教授 中東 靖恵 |

## 学位論文内容の要旨

### 2.1 研究背景

従来の中国語と日本語の否定疑問文の類型に関する研究は主に統語論や意味論の視点から行われて、多くの興味深い指摘が提供されてきた。しかし、研究者の分類基準や研究視点によって、否定疑問文に対する分類はまだ多説が存在している。また、否定疑問文は主に会話に使用され、しかも意味上に曖昧性を持ちやすい文のタイプである。「(本当に) 食べない?」「(少し) 食べない?」のように、同じ言語形式でも音声次第で意味が変わる場合がよくある。コンテキストがない場合、音声上の韻律情報が意味の曖昧さを解く唯一の手段となる。そのため、否定疑問文に対して音声の側面からの検討が必要であると考えられる。

各言語の否定疑問文に関する音声学的研究を調べた結果、次の問題点があることが分かった。まず中国語の否定疑問文の音声的特徴に関する考察は、まだ内省研究の段階にとどまっており、表現意図による否定疑問文のイントネーションの相違などの課題がまだ解明を待っている。

また、従来の日本語の否定疑問文の音声的特徴に関する研究は、主に否定疑問文と否定叙述文の比較に重点が置かれ、しかも、否定疑問文の選択について、「面白くない?」「(少し) 食べない?」のような同意要求や勧誘を表す文に集中している。他の用法を持つ否定疑問文の音声的特徴に関する記述はまだ十分とは言えない。また、形容詞を述語とする否定疑問文に比べて、動詞述語文を考察対象とする研究は福岡 (1998a, 1998b) など少数しかなかった。従来の形容詞述語文に関する結論が動詞述語文に適用できるかどうか、また検討する必要がある。さらに、先行研究にあるイントネーションの考察はピッチ偏重の傾向を持ち、持続時間やインテンシティなどの要素に関してはまだ精密に計測されていない。

## 2.2 研究目的

以上で述べた問題点に基づいて、本研究は主に次の3つの問題を明らかにすることを目的とする。

- (Ⅰ) 中国語母語話者と日本語母語話者の発話資料に対して、ピッチ・持続時間・インテンシティなどの側面から、各言語にある複数の用法を持つ否定疑問文の音声的特徴を記述する。
- (Ⅱ) 各用法を持つ否定疑問文の音声的特徴に基づいて、各文の焦点の種類を分析し、さらに各言語の否定疑問文の類型を検討する。
- (Ⅲ) 以上で得られた結果に基づいて言語間の比較を行う。具体的には、中国語と日本語における各用法を持つ否定疑問文に対してどのように類型化できるか、各言語では表現意図を弁別する音声上の要素が何かなどの課題を明らかにする。

## 2.3 結論

### 2.3.1 中国語の否定疑問文の類型

第4章では中国語にある「確認」「問い返し」「注意喚起」「提案」「依頼」「同意要求」の6つの用法を持つ否定疑問文を考察対象とし、ピッチレンジ・持続時間・インテンシティの複数の観点から、各文の音声的特徴を考察した。それに基づいて、各文の焦点の類型を分析し、最後にこの6つの否定疑問文を次の3つのタイプに分けた。

タイプ1には「確認」があり、この種の否定疑問文は自然焦点の文である。タイプ2には「問い返し」があり、これは話し手自身の驚きの表明が主な発話意図となる感情焦点の文である。この文ではインテンシティが主導的な役割を果たしている。音声上には、タイプ1に比べて、否定辞と動詞のピッチレンジ・持続時間・インテンシティが同時に増加した。タイプ3には「提案」「注意喚起」「依頼」「同意要求」があり、これらは話し手が文の一部を取り立てて述べる強調焦点の文であり、ピッチが主導的な役割を果たしている。そのうち、「提案」「注意喚起」では動詞にフォーカスが置かれ、音声上には、動詞のピッチレンジ・インテンシティが増加し、否定辞のピッチレンジ・持続時間・インテンシティが減少した。一方、「依頼」「同意要求」では動詞の後に付く内容にフォーカスが置かれ、音声上には、否定辞と動詞のピッチレンジ・持続時間・エネルギーが同時に減少した。

### 2.3.2 日本語の否定疑問文の類型

第5章では日本語にある「再確認」「問い返し」「提案」「注意」「発問」「同意要求」の6つの用法を持つ否定疑問文を考察対象とし、ピッチ・持続時間・インテンシティなどの側面から、各否定疑問文の音声的特徴を総合的に記述した。そのうちのピッチの特徴に基づいて、各文の焦点の類型を分析し、最後にこの6つの否定疑問文を次の3つのタイプに分けた。

タイプ1には「再確認」がある。この種の否定疑問文は文頭に平坦なピッチが続くことが他の文とは区別している。また、否定叙述文のピッチ曲線と比較した結果、この文は否定叙述文と同じく自然焦点の文であると考えられる。タイプ2には「問い返し」があり、これは話し手自身の驚きの表明が主な発話意図となる感情焦点の文である。音声上には、/nai/ の上昇幅・文全体のピッチについてタイプ1とは同じ特徴を持つが、文頭に広いピッチレンジが見られるのがタイプ1とは区別している。また、①文頭のピッチレンジ、②文全体のピッチ、③動詞が起伏型の場合、アクセント核のある音節のピッチレンジの面では、タイプ3より有意に大きい。タイプ3には「提案」「注意」「発問」「同意要求」があり、これらは話し手が動詞を取り立

て述べる強調焦点の文である。音声上には、文頭にある動詞のピッチレンジがタイプ1より広い。

### 2.3.3 中国語と日本語の否定疑問文の類型

本研究では中国語と日本語の母語話者の発話に観察された音声的特徴に基づいて、各言語における複数の用法を持つ否定疑問文をタイプ化した。また、各タイプの否定疑問文に見られた音声的特徴がそのタイプの文のフォーカスとの関連を検討した。その結果、否定辞と組み合わせる語の声調/アクセントとは関わらず、各タイプの否定疑問文は同じ情報構造（焦点の種類・位置）を持つことが分かった。

また、意味の弁別に影響する音声上の要素に関して、中国語と日本語のいずれもピッチが主な役割を果たしている。しかし、声調言語である中国語において、意味の弁別は各音節自身のピッチレンジとの関わりがより密接である。一方、ピッチアクセント言語である日本語では、音節の間のピッチの差との関わりが意味の弁別に影響する重要な要素となる。

## 学位論文審査結果の要旨

孫爽氏により提出された学位請求論文「日中両言語の否定疑問文の音声的特徴による類型について」に関する学位論文審査会は、2022年6月24日（金）17時10分より19時まで法文経一号館2階2-2セミナー室で行われた。学位論文審査委員会は、栗林裕（主査：言語学）、片桐真澄（言語学）、宮崎和人（日本語学）、中東靖恵（社会言語学、日本語音声学）の各教員の合計4名で構成された。

初めに孫爽氏自身が論文全体の要旨をパワーポイントで提示しながら説明した後、予備論文で指摘された問題点に対してどのように対応し、予備論文以降の改訂について説明があった。引き続き、個々の審査委員から質問およびコメントが出された。

本論文は中国語と日本語の否定疑問文の類型について、音響音声学の観点から分析したものであり、学術雑誌への掲載論文や口頭発表した内容を中心にまとめられ、全6章から構成される（総頁数A4版123頁）。本論文の研究内容は以下のように、外部からの客観的な審査を経ている：発表前審査ありの国内全国大会での口頭発表（日本言語学会、関西言語学会、日中対照言語学会）（単独3回、共同1回）、発表前審査なしの研究会での口頭発表（中国語文法研究会）（2回）、発表前審査ありの国際学会での口頭発表（単独1回）の合計7回の口頭発表と、日本の査読付き学会誌（関西言語学会）（共著1本、単著1本）、日本の査読付き学会誌（日中言語対照研究論集）（単著1本）及び中国の査読付き国際学術雑誌（単著1本 採用済み）の合計4本の学術論文を発表している。

本論文では、中国語と日本語の否定疑問文のピッチを中心とする音声学的な特徴について、先行研究の諸問題を丹念に検討し、さらに質問調査に基づく様々な記述的音声データを収集して、ピッチ・持続時間・インテンシティの側面から分析・検討して論を進めたものであり、次のような章の構成になっている。

### 第一章 序論

### 第二章 中国語の疑問文に関する音声的研究

第三章 日本語の疑問文に関する音声的研究.

第四章 中国語の否定疑問文の音声的特徴による類型

第五章 日本語の否定疑問文の音声的特徴による類型

第六章 結論と今後の課題

研究方法としては、中国語および日本語を母語とする被験者を対象に、定められた手順に基づいて音声ファイルの提出を依頼することによって言語の音声調査を実施し、音声分析ソフトウェアの **Praat** を用いて音声分析を行った後、得られた数値に対して統計分析を行った。本論での研究成果は概ね次のようにまとめることが出来る。

(I) 否定辞と組み合わせる単語の声調(あるいはアクセント)及び文の意味を考慮した上で例文を作成し、産出実験を実施した。得られた中国語母語話者と日本語母語話者の発話データに対して、ピッチ・持続時間・インテンシティなどの複数の指標を用いて、各言語に見られた否定疑問文の音声的特徴を記述した。

(II) 否定疑問文の種類により異なる音声的特徴に基づいて、各文の情報構造(焦点の種類や位置)を分析し、さらに両母語話者の否定疑問文の特徴による類型化を試みた。

(III) 得られた結果に基づいて中国語と日本語の言語間の比較を行なった。具体的には、中国語と日本語の否定疑問文はどのように類型化できるかということ、さらにそれぞれの言語での発話意図を弁別する音声的要素の解明を行った。

類型化のための具体的な分析項目として中国語では「確認」「問い返し」「注意喚起」「提案」「依頼」「同意要求」の6項目、日本語では「再確認」「問い返し」「提案」「注意」「発問」「同意要求」の6項目のピッチ・持続時間・インテンシティなどを計測した。分析手法として対応分析などを主に活用しながら、得られた音声的データの特徴付けを試みた。その際に数値の正規化を実施して、精緻な分析結果を提案した。結論として、それぞれの言語の6つの分析項目を数値に基づいた派生関係により3つのタイプの類型化を新たに提案した。ただ二言語の対照については十分な考察が進んでおらず、項目の違いが何に起因するのか、発話の意図に関わる分析項目と意味形式に基づく分類項目が並行的に分類されるなどの分類上の問題は残されている。また派生関係の提示は主にピッチレンジなどの数値によるものであり、その他の要因との関連についても論じる必要があると考えられる。

本研究の特色は中国語の母語話者である孫爽氏が、両言語での先行研究を丹念に調べてまとめた後、日本語学における否定疑問文の最新の研究成果をもとに両言語の音調に関わる音声的特徴を精査し、特に中国語の音声的特徴を詳細に分析したところが重要な学術的貢献であると評価できる。さらに日本語教育の場にあつて音調などの音声的特徴の提示は文法的特徴の提示よりも比較的重視されない中にあつて、日本語の音声教育にも活用することにより、将来的には中国における日本語教育をさらに深化させることに貢献することが出来る。

審査委員から出された意見としては主に次のようなものであった。共通する見解として、予備論

文で指摘された問題点を踏まえた修正がなされ、また新たなデータ収集を実施して、新たな章が追加したことは評価できる。さらに個別の意見として、中国語と日本語を対照することにより、二言語の違いが何に起因しているのか、またそれはなぜなのかという点に関する分析が不十分であること、例文の意味的な分類の仕方に問題があること、ピッチレンジの広さは方言差にも関わりあるため社会言語学的な観点から論じることさらに研究の深化につながるなどが指摘された。

審査委員会は、孫爽氏の学位請求論文には若干の課題はあるものの、その研究成果の意義を認め、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容であることを全員一致での結論とした。